

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月29日現在

機関番号:32517
 研究種目:若手研究(B)
 研究期間:2008~2012
 課題番号:20730346
 研究課題名(和文)女性の生活の変化—高齢期の準備とその後の生活スタイル—

研究課題名(英文)Changes in Women's Lives-Preparation for Old Age and the Ensuing Lifestyle-

研究代表者

川口 一美(KAWAGUCHI KAZUMI)

聖徳大学・心理・福祉学部・准教授

研究者番号:00352675

研究成果の概要(和文):本研究での結果として、現在の高齢者女性は、それまでの生活の中で、特に「老後のため」と意識していることは少なく、日々の生活のために行っていることの積み重ねが(現在の)老後に続いている状況であった。その中でも金銭的なこと(貯蓄や無駄遣いをしない)や健康(日々食事等に気をつけるなど)は意識していた人が多かった。

また、現在の老後の状況については、自ら選んだものというより、他者からの影響を受けて現在に至っていることも分かった。

女性は、これまでの人生で築いてきた対人のネットワークを使い、日々の生活をしている。それが、楽しみや生きがい、助け合い等につながっている。

研究成果の概要(英文):From this research, we can conclude that elderly women were very seldom conscious of leading their lives with the ultimate objective of "old age." Rather, the accumulation of actions which they performed in everyday life were simply carried over into the current state of "old age." Many women were particularly aware of financial (saving as opposed to wasting money) and health (being mindful of daily dietary habits) issues.

It was also discovered that elderly women were more influenced by others in arriving at their current situation, as opposed to personally choosing their lifestyle in old age. Elderly women live their lives by making full use of interpersonal networks they have developed over the years. This in turn leads to greater personal enjoyment, improved quality of life, and fosters a spirit of cooperation.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	0	0	0
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野:社会科学

科研費の分科・細目:社会学

キーワード:文化・宗教・社会意識・高齢期女性・生き方

1. 研究開始当初の背景

(1) 時代背景

団塊の世代が定年退職をはじめ、2007年問題が社会の中で注目されている時期である。いわゆる「団塊の世代」はその後徐々に定年を迎え、平成27年度に完全に65才以上となる。その頃の高齢者は、3,395万人にも及ぶ。その後も高齢者人口は増え続け、2040年頃に3,878万人でピークを迎えるとされている。その後は、減少に転じると推測されている。

日本は高齢社会となって久しく、今後30年～50年の間に、私達はこれまで経験したことのない、超高齢化社会に向かう。高齢者が増加し、総人口が減少する中で、老後に向けどのような準備ができるのかを考えた。

(2) 社会背景

「リタイア後をどのように過ごすか」は団塊の世代だけに限らず、近年の重要なテーマであると思われる。なぜなら家族の形の変容や健康、介護問題、公的な社会保障に対する不安、私達は自らの生活とりわけ老後に漠然とした不安を抱えているからだ。

これから高齢者となる人々は、老後をどのように考え、それに向けどのような準備をしているのか。加えて、現在の高齢者は「もっとどんな準備をすれば良かった」と考えているかを知ること、当面の高齢者問題、高齢社会の課題に対して、個々人や社会が準備することが可能になると考えた。

2. 研究の目的

(1) 研究動機

団塊の世代が高齢者となり始めた今、団塊の世代対策が進んでいる。例えば、介護や福祉においては、その世代の人々が満足するサービスの、またその人数に対応できる様な量の充実を進めている。

社会の中でも自分の人生をどう過ごすか(ワークライフバランス等)、とりわけ、退職後の人生をどう過ごすかというセミナーは多く、生きがいや自分らしい生活探しを提案している。個々人で老後に向け備え、健康維持に努め、老後をどう過ごすか考える機会も増えている。また、企業においても定年前に退職準備教育を行っている所も多い。

これらを鑑み、高齢者や高齢者予備群たちは準備をし、老後に対しソフトランディングができるような道筋があることが分かった。しかし、これらの準備

教育等は、会社員で仕事を定年する人(主に男性)を対象として作られているものが多い。いかに「今まで関係の薄かった地域に溶け込んでいくか」やこれまでの仕事での日常を退職後の日常に変えていくかというようなこれまでと違う生活への仕切り直しが目的だった。

女性の社会進出が進んだとはいえ、定年まで正社員で勤める女性は少なく、また、日常と退職後の生活の違いが男性のように(多く)ない女性の場合は、どのような準備が必要なのか、またどんな準備をしているのかを具体的に見ることが必要であると考えた。

(2) 明らかにしたいこと

本研究では、様々なライフコースをたどる可能性のある女性に焦点を合わせることにする。その理由として、男性は定年退職というきっかけや区切りに向け、準備をし考えることが可能である。しかし女性は、結婚、出産、子育て、介護など、いくつかのイベントによってその時々で生活が変わる。また専業主婦であっても働いていても、地域や近隣との関わりは男性よりも深い。

よって、男性と同じような準備をし、生活設計、生活スタイルを持つとは考えにくいので、老後独自の生活準備(時期、内容、考え方)があるのではないかと考えた。

3. 研究の方法

これまでの調査や研究等を調べてみると団塊の世代の実態調査や高齢者の生きがい調査は多く存在した。だが、現在進行形の世代が移り変わる状況をとらえた調査は少なく、また生活の変化や内容を把握できるものは無かった。

また、定年への準備等では、男性に視点があり、その講座や教育は女性にとって当てはまらない部分や活用できないことも見られた。

これらのことから本研究の調査の方法としては、以下のような計画で行うこととした。

本研究は、4年計画で行い、調査については、1年目では、団塊の世代や高齢者女性に関する文献、資料収集とそれらの検討、および次年度以降の調査に向け調査協力者との関係作り、2年目に質問紙調査を行った。質問項目としては以下のようなものがあげられる。年齢、居住年数、家族・仕事・老後の生活(考

え方)、老後に向け準備したこと、簡単な生き立ちについて等である。3, 4年目にインタビューおよび観察調査を実施した。

質問紙調査およびインタビュー、観察調査は、同地域で実施した。質問紙調査の調査協力者のうち、同意してくださる方に対しインタビューおよび観察調査を実施した。

なお、インタビューおよび観察調査については、論文等の掲載前の文字化した時点で調査協力者に確認していたき、使用部分等の調整を行った。

4. 研究成果

(1) 文献等の調査からの考察

これまでの高齢者に関する調査を見ると、多くの調査が存在する。例えば、経済、社会活動や社会参加、地域との交流、生きがいや健康、福祉・介護など様々である。

現在の高齢者を実際に見てみると、生きがい(趣味、仕事、過ごし方)などについてこれまでの高齢者以上に注目し、また自ら意識的に実践している。

また、女性の生活意識に関する調査では、女性の生活環境の変化に伴い、女性の生活意識の変化や理想とする生活像の調査を行っているものが多かった。しかし、その中で生活全般を網羅しているものは少なく、女性であれば、「就労」、「結婚」、「出産」などの範囲に限定されることが多く、子どもが巣立った後(中高年の時期)については、(生活について)あまり取り上げられていない。

団塊の世代などの中高年女性のみを取り上げ、生活実態を把握する調査はある職業や職種に限定して追跡した調査は見られたが、それ以外はほとんど無いに等しい。また、中高年という長いスパンで生活をとらえる(老後の準備と老後の実際)研究蓄積は少なかった。

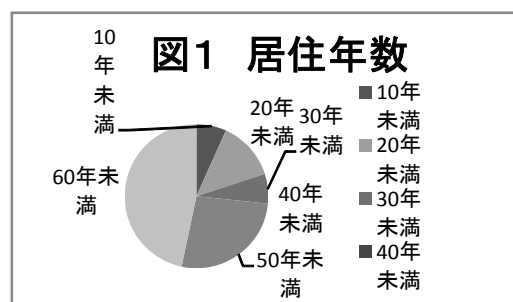
現在、中高年女性はどのような状況に置かれているのかを見ると、45才くらいから将来や老後の収入について意識をしている。加えて、55才以上の女性は、自分の健康や病気・老後について目下の悩み、ストレスの原因になっている。若年層のストレス(友人との人間関係や育児、職場の人間関係等)と明らかに異なる、これからの生活・生き方に関することが悩みやストレスの原因になっている。

女性はある程度の年齢になると、健康

や病気、のちの自分の老後についても意識をいはじめる。ただ、どれも大きな日常生活の不自由さに結びつくものではないため、意識をする程度にとどまっている。

(2) 質問紙調査

今回は、東京のベッドタウンであり、高度経済成長期に大型団地が造成された地域での調査を行った。現在この団地は高齢化が進んでいる。調査協力者の多くは、この団地ができた当初から住んでいる住民で、結婚を機に移り住んだケースがほとんどである。



調査協力者の多くは、この地に長く住んでおり、地域との関係性が築けている。(図1)

年齢については、50代~80代まで、未婚、既婚(離婚・死別等を含む)者だった。うち、半数以上が現在一人暮らし、次いで夫と二人暮らしであった。現在、約半数が仕事をしていた。(有給でないものも含む)

老後に関する考え方としては、「老後」を70才~と答えた人が一番多く、次いで、65才、75才および80才と続く。(図2)

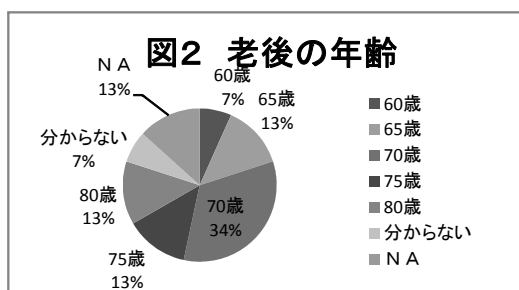
また、「老後の生活」について思い浮かべることとして、「年金を受ける」、「配偶者が仕事から引退」を思い浮かべる人が最も多く半数を占めた。「老後の生活で不安に思うこと」としては、「自分の健康」、「お金」が一番多く30%、次いで配偶者や自分の「健康」・「介護」が続いた。

実際に自分自身の老後を意識したきっかけでは、「自分の身体の衰え」をあげた人が半数を占めた。「老後」を意識して行ったこと(行っていること)は、「食生活を意識」し、生活面の見直しを図ったという。具体的にはバランス良く食べることや粗食等を意識し、早寝早起きやよく動く等をあげていた。また、

収入は決まっているため、特に新たに何かするより、生活の中の無駄遣いを減らすなどを意識したという声が多かった。

「具体的な老後の準備」について全体の3分の1は、健康管理、貯蓄、人との関係作り(家族、近隣)、自分の最期について書き残す等何らかの行動を起こしていたが、それ以外の3分の2については、特に意識して準備をしていない・はっきりと意識したことがない・ちゃんと考えたことがない等漠然とした意識のままであった。例えば、老後についての相談を誰かとしているかについても、具体的に相談している人(夫、兄弟、子ども等)を挙げる人は2割程度にとどまった。

老後について(自分には)もっと後のことととらえている様で、年齢としては、老後に該当するが、「老後の生活」という意識は薄いようだ。



今振り返って、しておけば良かったと思う準備は、「預貯金」が大多数を占めた。

また、今振り返って今の生活に役立っていることや活かしていることとしては、「地域の中の人間関係」や「趣味」、「近所付き合い」を多くの女性が挙げていた。これらはまた、生きがいとして認識する女性も多かった。これまで作り上げてきた関係をうまく利用し、生活していることの表れかと思われる。

(3) インタビュー・観察調査

今回のインタビューおよび観察調査は、15名の調査協力者に対して実施した。個別な内容、プライバシーに関する質問、観察内容等も多かったため、事前の説明、調整等を密に実施した。最終的にフィールドノートとして観察したものをまとめた。(例えば、一日の過ごし方、他者との関係をエコマップ

にする等) また、聞き取った内容等を簡単なライフヒストリー等にまとめ、希望者にはフィードバックした。

インタビュー時の質問内容は、質問紙調査の項目についてより深めて話を伺った。(ライフイベントについて、そのときの心情、具体的にやったこと、生活状況等)。

人生の後半になるに従い、自分の決定でその生活を行っていく人は減り、ライフイベントごとに、自分で決定したという意識が薄くなる印象を受けた。例えば結婚をすると夫が人生設計の主となったり、子ども中心の生活となったり、夫の退職、親等の介護によって、必要に迫られその日常生活を送っていた。

その反面、日常生活を送っている「いまここ」の場所で、関係を紡い、それを拠り所として、活用し着実にその地に根をおろしていた。

まとめ

(1) 老後の生活の決定要因

自分の老後の生活を決定する要因は何か考えると2つの側面がある。事前に準備ができるものとその時点でおきてくるもの(その時になってみないと分からないこと)である。

事前に準備できるものとして、「お金」、「配偶者の生活設定」、「自分の生活設定」、「子どもとの関係」が挙げられる。

その時によって異なる側面としては、「自分や配偶者の健康・病気」、「自分や配偶者の介護」がある。ただ、これについても長いスパンで見れば、生活の中で健康維持、生活管理によってある程度の予防が可能となる。

(2) 今後の課題

今回の調査では、老後という括りよりは生活全般での課題が、女性の老後に関係していることが分かる。例えば、健康やお金など老後のその時になってからでは、方向転換が難しいものが不安要因になっている(男性はこれに加え、異なる点(老後の過ごし方や地域の人間関係)が、問題や課題となっている)。

今後女性がより良い老後を送るために、自らが老後について自発的に考え、計画するきっかけを生活の中に取り入れる必要があると考える。例えば、普段の生活上の健康啓発、金銭について

は、具体的な老後とお金というような目に見える形でのアドバイス、そして不安が軽減できるようなお金(の保障)、老後の具体的計画を立てる機会等が必要なのではないかとと思われる。

これから先に高齢者になる高齢者予備軍(私たちを含めた)の老後を考えた時に、このままの状態を続けて自分らしい生活が送れるのだろうか。女性は女性用の準備や心構えを持って、この時期を迎えた方が、有意義に自分らしい時間を過ごせるのではないだろうか。

私達は自分の老後の準備を中高年になる前から行い、また老後について様々な学習をする(自分の生活をデザインすること)ことで、自分らしい老後を送ることができるようになる。これは、自分の生活を早い時期から計画的に考え、老後のために生きるわけではないが、生活をするときに老後の自分をも意識することで、自発的に老後の環境作り(準備)をすることに他ならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

① 川口一美 高齢期女性の生活を決定する要因—それまでの準備と老後の生活の関係— 聖徳大学研究紀要 査読有 第23号 2013年 15-22

② 川口一美 自分の人生をデザインすることの重要性 聖徳通信 査読無 第60号 2012年11月 54

③ 川口一美 中高年女性の老後に関する—考察—聞き取り調査を中心に— 聖徳大学生涯学習研究紀要 査読有 第10号 2012年 53-59

④ 川口一美 中高年女性の生活実態に関する研究—より良い今後の人生のためのステップ— 聖徳大学研究紀要 査読有 第21号 2011年 1-6

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川口 一美 (KAWAGUCHI KAZUMI)
聖徳大学・心理・福祉学部・准教授
研究者番号：00352675